



ダカール港改修のための調査に向け、ダカール港湾公社とキックオフミーティングを実施した(右から3人目が峰さん、同8人目が公社総裁)

都市の発展を支える マスタープランを提供したい

限られた土地をいかに有効活用し、長期的に都市を健全な発展へと導くのか。峰直樹さんは、あらゆる利害関係者と協力しながら、開発途上国の都市開発を支えている。

なぜ、から始まった 開発分野への興味

私の出身地、横浜市鶴見区には京浜工業地帯があり、特に南米や東南アジアなどの外国の方が多く住んでいます。小中学校時代は外国籍の同級生がいたため、外国文化を身近に感じていました。開発途上国の問題に具体的な関心を持つようになったのは、高校2年生のときに参加した、NGO主催のフイリピンスタディーツアーがきっかけです。マニラの発展とは対照的なストリートチルドレンの姿に衝撃を受け、「大都市で、なぜ同年代の子たちがこのような状況に置かれているのか」と関心を抱くようになりました。

大学では、開発経済学・都市経済学を勉強しました。インフラ整備を通じて途上国の経済発展に貢献したいと考え、卒業後は主に中東・アフリカ産油国で、液化天然ガス(LNG)・石油精製などのエネルギープラントの建設を手掛ける民間企業に就職。海外営業本部で3年間働いた後、「途上国の人々と意見を交わしながら、開発に携わりたい」という思いが再び芽生え、2007年にJICAに転職しました。

13年から約2年半過ごしたセネガル事務所では、ダカール都市開発マスタープランプロジェクトやダカール港改修プロジェクトに携わりました。同国の首都ダカールでは、地方からの人口流入により、洪水の危険性がある



社会基盤・平和構築部
都市・地域開発グループ
第二チーム
峰 直樹
MINE Naoki

大学卒業後、3年間の民間企業勤務を経て、2007年にJICAに就職。調達部、資金協力業務部を経験後、12年よりフランス留学。帰国後はセネガル事務所でのインフラ分野の案件を担当。昨年10月より現職。

地域への居住、交通渋滞、農地の減少などが深刻な問題となっていました。そこで、JICAは政府機関との協議、計20回の住民との意見交換、科学的な現状分析を通じて、2035年が目標年の「ダカール首都圏開発マスタープラン」を作成しました。プロジェクト当時は、政府や地域住民らが、ダカールという都市に何を求めているのか、それに對し、何を提案できるのかを意識しました。

ダカール港は隣国マリも利用する国際港です。マリは西アフリカの最貧国の一つですが、内陸国なので、この港を使わないと市民に生活物資が届きません。同国の経済成長のためにもダカール港は重要な位置付けにあり、その改修工事をぜひ実現したいと思っていました。

当初、ダカール港湾公社の総裁や担当局長にはプロジェクトの必要性をすぐに理解してもらえませんでした。それでも、案件形成に向け、約3カ月間、週に1〜2度は公社に通い、相手の話を傾けながら粘り強く話し合ったことで、プロジェクト実施の合意に至りました。来年にはダカール港改修が着工を迎えるので、今後が楽しみです。これらの案件を通じて、目標に向け、粘り強く取り組む姿勢を学びました。

成長著しい都市を 管理する道しるべ

昨年10月から勤務している社会基盤・平



ダカール首都圏開発マスタープランプロジェクトで、都市の将来ビジョンと戦略について、関係機関と協議した

和構築部では、アジアやアフリカの都市開発・都市交通分野の技術協力を担当しています。途上国では都市の人口が急速に増えていますが、都市の将来像や開発計画を持たないまま、目先のインフラ整備に終始しているケースが多々あります。JICA職員役割は、都市開発分野の日本の経験を基に、途上国の都市が直面する課題を見極めて、短期的・中長期的な解決策を包括的に提示していくことだと思っています。

その際には、まずは相手が何を求めているのかに耳を傾けることを意識して、これからも努力していきたいと思っています。